

石清虚

國木田獨歩

青空文庫

雲飛うんぴといふ人は盆石ぼんせきを非常に愛あい翫ぐわんした奇人きじんで、人々から

石狂者いしきちがひと言はれて居たが、人が何と言はうと一切頓さいとん着ちやくせず、

珍めづらしい石の搜索さうさくにのみ日を送つて居た。

或日あるひ近所きんじよの川かはに漁れふに出かけて彼處かしこの淵ふち此所こゝの瀬せと網あみを投うつて

廻まはるうち、ふと網かに掛かつたものがある、引ひいて見たが容易よういに上あが

らないので川はひに入はつて探さぐり試こみると一ひと抱かもありさうな石いしであ

る。例きの奇癖へきは斯かういふ場合ばあひにも直すぐ現あらはれ、若ちんしや珍石せきではあ

るまいかと、抱だきかゝへて陸をかに上あげて見ると、果はたして！ 四面玲めんれ

龍りゆう、峯秀みねいで溪幽たぬすかに、亦またと類ななき奇石きせきであつたので、雲飛うんぴ先生せんせい

涙なみだの出るほど嬉うれしがり、早さつ速そく家いへに持もち歸かへつて、紫檀したんの臺だいを造こしらえ

之を安置した。

靈なる哉この石、天の雨降んとするや、白雲油然として孔々より湧出で溪を越え峯を摩する其趣は、恰度窓に倚つて遙かに自然の大景を眺むると少も異らないのである。

權勢家某といふが居て此靈妙を傳へ聞き、一見を求に來た、

雲飛は大得意でこれを座に通して石を見せると、某も大に感服して眺て居たが急に僕に命じて石を擔がせ、馬に策つて難有うとも何とも言はず去つてしまつた。雲飛は足ずりして口惜が

つたが如何することも出来ない。

さて某は僕を従へ我家をさして歸る途すがら曩に雲飛が石を拾つた川と同流に懸つて居る橋まで來ると、僕は少し肩を休める積

りで石を欄干にもたせて吻と一息、思はず手が滑つて石は水
 づけむり煙を立て河底に沈んで了つた。

言ふまでもなく馬を打つ策は僕の頭上に霰の如く落ちて來た。
 早速金で傭はれた其邊の舟子共幾人は魚の如く水底を潜つ
 て手に觸れる石といふ石は悉く岸に拾ひ上られた。見る間に何十
 個といふへボ石の行列が出來た。けれども靈妙なる石は遂
 に影をも見せないで流石の權勢家も一先搜索を中止し、
 懸賞といふことにして家に歸つた。懸賞百兩と聞て其日から
 河にどぶんく飛込む者が日に幾十人さながらの水泳場を
 現出したが何人も百兩にあり着くものは無つた。

雲飛は石を奪はれて落膽し、其後は家に閉籠つて外出しな

かつたが、石が河に落ちて行衛不明になつたことを傳へ聞き、或朝早く家を出で石の落ちた跡を弔ふべく橋上に立て下を見るとき、河水清徹、例の石がちやんと目の下に横はつて居たので、其まゝ飛び込み、石を懷て濡鼠のやうになつて逃るが如く家に歸つて來た。最早《しめ》たものと、今度は客間に石を置かず、居間の床に安置して何人にも祕して、只だ獨り楽しんで居た。すると一日一人の老叟が何所からともなく訪ねて來て祕藏の石を見せて呉れるといふ、イヤその石は最早他人に奪られて了つて久しい以前から無いと謝絶つた。老叟は笑つて客間にちやんと据えてあるではないかといふので、それでは客間に來て御覽なさい決して有りはしないからと案内して内に入つて見ると、

こは如何いかに、居間ゐまに隠かくして置いた石が何時いつの間まにか客間きやくまの床とこに据すゑてあつた。雲飛うんぴは驚愕びつくりして文句もんくが出でない。

老叟らうそうは靜しづかに石いしを撫なで、『我家うちの石いしが久ひさく行ゆき方がた知しれず居ゐたが先まづづ、此處こゝにあつたので安堵あんどしました、それでは戴いたゞいて歸かへることに致いたしましょう。』

雲飛うんぴは驚おどろいて『飛とんだことを言いはるゝ、これは拙せつ者しや永年ながねん秘ひ藏ざうして居ゐるので、生命いのちにかけて大事だいじにして居ゐるのです』

老叟らうそうは笑わらつて『さう言いはるゝには何なにか證據しやうこでも有あるのかね、あなたあなたの物ものといふ歴れきとした證據しやうこが有あるなら承うけたまはり度たいものですか、雲飛うんぴは返事へんじに困こまつて居ゐると老叟らうそうの曰いく『拙せつ者しやは故ふるくから此石こゝ

とは馴染なじみなので、この石いしの事ことなら詳細くわしく知しつて居ゐるのじや、抑おさも此

石には九十二の竅あながある、其中の巨な孔の中には五の堂宇がある、
貴君あなたは之れを知つて居らるゝか』

言はれて雲飛うんぴは仔細しさいに孔こう中ちゆうを見みると果して小さな堂宇だうがあ

つて、粟粒あはつぷほどの大きさで、一寸見ちよつとみた位では決して氣きが附つかぬほ

どのものである、又た孔竅あなの數かずを計算けいさんするとこれ亦た九十二あ

る。そこで内ない心しん非ひ常じやうに驚おどろいたけれど尚なほも石いしを老叟らうそうに渡わたすこ

とは惜をしいので色いろ々くと言いひ争あふた。

老叟わらは笑わらつて『先まづ左様言さういはるゝならそれでもよし、イザお暇いとま

を仕しましよう、大おほにお邪魔じやまで御座ござつた』と客間きやくまを出でたので雲飛うんぴ

も喜よろこび門もんまで送おくり出でて、内かへに還かへつて見いると石いしが無ない。こいつ彼あ

老爺おやぢが盗ぬすんだと急きふに追おつかけて行いくと老人いろう悠く々くとして歩あいて居る

ので直ぐ追着くことが出来た。其袂を捉へて『餘りじやアありませんか、何卒返却して戴きたいもんです』と泣聲になつて訴へた。

『これは異なることを言はるゝものじや、あんな大なる石が如何して袂へ入る筈がない』と老人に言はれて見ると、袖は軽く風に飄へり、手には一本の長い杖を持ち、小石一つ持て居ないのである。ここに於て雲飛は初て此老叟決して唯物でないと氣が着き、無理やりに曳張て家へ連れ歸り、跪いて石を求めた。

乃で叟の言ふには『如何です、石は矢張り貴君の物かね、それとも拙者のものかね。』

『イヤ全たく貴君の物で御座ます、けれども何卒か枉て私に賜り

たう御座ます』

『それで事は解つた、室を見なさい、石は在るから。』

言はれて内室に入つて見ると成程石は何時の間にか紫檀の

臺に還つて居たので益々畏敬の念を高め、恭しく老叟を仰ぎ見

ると、老叟『天下の寶といふものは總てこれを愛惜するものに

與へるのが當然じや、此石も自ら能く其主人を選んだので

拙者も喜しく思ふ、然し此石の出やうが少し早すぎる、出やう

が早いと魔劫が未だ除れないから何時かはこれを持って居るものに

禍するものじや、一先拙者が持歸つて三年経て後貴君に差上

げることに仕たいものぢや、それとも今これを此處に留め置ば貴

君の三年の壽命を縮るが可か、それでも今直ぐに欲う御座るかな

雲飛うんぴは三年じゆみやうの壽命位ろゐなんは何なでもないと答こたへたので老叟らうそう、二本ふたの指ゆびで一の竅あなに觸ふれと思おもふと石いしは恰あだかも泥どろのやうになり、手てに隨したがつて閉とぢ、遂つひに三個みつの竅あなを閉ふいで了しまつて、さて言いふには、『これで可よし、のこりあなが貴君あなたの壽命かすだ、最早もうこれでお暇いとまと致いたさう』と飄然へうぜん残らうの竅あなの數かずが貴君あなたの壽命かすだ、最早もうこれでお暇いとまと致いたさう』と飄然へうぜん老叟らうそうは立たち去さつて了しまつた。留とめて留とまらず、姓名なを聞きいても言いはずに。其その後のち石いしは安あん然ぜんに雲飛うんぴの内ない室しつに祕藏ひさうされて其その清せい秀しうの態たいを變かへず、靈妙れいめうの氣きを失うはずして幾いく年ねんか過すぎた。

或年あるし雲飛うんぴ用事ようじありて外出がいしゅつしたひまに、小偷人こぬすびとが入はいつて石いしを竊ぬすんで了しまつた。雲飛うんぴは所謂いはゆるる掌しやう中ちゆうの珠たまを奪うばはれ殆たいていど死しなうとま
 でした、諸所しよくに人ひとを出だして搜さがさしたが踪跡ゆきがたが全まるで知しれない、其

中二三年經ち或日途とちゆう中ちゆうでふと盆ぼんせき石いしを賣て居る者に出遇た。であつちかづ近ちかづいて視みると例れいの石いしを持て居るので大に驚おどろき其男をとこを曳ひきつて役場やくばに出いて盜難たうなんの次第しだいを訴うつた。竅あなの數かずと孔こうちゆう中ちゆうの堂宇だうぐの二證據しやうこで、石いしは雲飛うんぴのものといふに定きまり、石賣いしは或人あるひとより二十兩出いして買かつた品しなといふことも判然はんぜんして無罪むざいとなり、兎とも角かくも石いしは首尾しゆびよく雲飛うんぴの手に還かへつた。

今度こんどは石いしを錦にしきに裏つんで藏くらに納め容易よういには外そとに出いさず、時々出いして賞めで樂たのむ時は先かうづ香かうを燒たいて室しつを清きよめる程ほどにして居た。ところが權けんくわん官くわんに某なにかといふ無法者むはふものが居て、雲飛うんぴの石いしのことを聞きき、是非ひに百兩ひやくらうで買かひたいものだと申まう込んだ。何なにがさて萬金まんにん尚なほ易かへじと愛惜あいせきして居る石いしのことゆゑ、雲飛うんぴは一言ひとことのもとに之これを謝絶しやぜつし

て了しまつた。某は心中深く立腹して、他の事にかこつけて雲飛を
 中傷ちゆうしやうし遂に捕へて獄に投じたそして人を以て竊に雲飛の妻に、
 實は石が慾ほしいばかりといふ内意を傳へさした。雲飛の妻は早速
 子と相談し石を某權官に獻じたところ、雲飛は間もなく獄
 を出された。

獄ごくから歸つて見ると石がない、雲飛は妻を罵り子を毆ち、怒に
 怒り、狂くるひに狂くるひ、遂に自殺しようとして何度も妻子に發見さ
 れては自殺することも出来ず、懊惱煩悶して居ると、一夜、
 夢に一個の風采堂々たる丈夫が現れて、自分は石清虚と
 いふものである、決して心配なさるな、君と別れて居るのは一
 年許のことで、明年八月二日、朝早く海岱門に詣で見給へ、二

十錢の代價で再び君の傍に還て來ること受合だと言ふ。其言葉の
 一々を雲飛は心に銘し、やゝ氣を取直して時節の來るのを待
 て居た。

そこで彼の權官は首尾よく天下の名石を奪ひ得てこれを
 案頭に置いて日々眺めて居たけれども、噂に聞きし靈妙の働は
 少しも見せず、雲の湧などいふ不思議を示さないので、何時しか
 石のことは打忘れ、室の片隅に放擲して置いた。

其翌年になり權官は或罪を以て職を剥れて了い、尋で死亡し
 たので、僕が竊かに石を偷み出して賣りに出たのが恰も八月二日
 の朝であつた。

此日雲飛は待ちに待つた日が來たので夜の明方に海岱門に

詣で見ると、果して一人の怪しげな男が名石を擔いで路傍に立て居るのを見た。代を聞くと果して二十錢だといふ、喜んで買ひ取り、石は又もや雲飛の手に還つた。

其後雲飛は壯健にして八十九歳に達した。我が死期來れりと自分で葬儀の仕度などを整へ又た子に遺言して石を棺に收むることを命じた。果して間もなく死んだので子は遺言通り石を墓中に收めて葬つた。

半年ばかり經と何者とも知れず、墓を發いて石を盗み去たものがある。子は手掛がないので追ふことも出來ず其まゝにして二三日經た。一日僕を従へて往來を歩いて居ると忽ち向から二人の男、額から汗を水の如く流し、空中に飛び上り飛び上り

して走りながら、大聲で『雲飛先生、雲飛先生！ さう追
 駈けて下くだきますな、僅わづか四兩かの金かねで石を賣かりたいばかりに仕したこ
 とですから』と、恰あだも空くう中人ちゆうあるごとくに叫さけび來くるのに出で遇あ
 った。

矢やには引捕ひつへて官くわんに訴うつた。伏罪ふくざいしたので、
 石いしの在あり所かも判明はんめいした。官吏やくにんは直すぐ石を取寄とりよせて一見いちけんすると、
 これ亦たちた忽たまち慾よく心しんを起おこし、これは官くわんに没收ぼつしうするぞと嚴おごかに言い
 ひ渡わたした。其處そこで廷てい丁ていは石を庫くらに入いんものと抱だき上あげて二三歩ある
 くや手ては滑すべつて石は地ちに墮おち、碎くだけて數十片すうになつて了しまつた。
 雲飛うんぴの子こは許可ゆるしを得えて其片へん々ぺんを一ひとつつくひろ拾ひろつて家もちに持か歸かへり、
 再ふたび亡なき父ちちの墓はかに收をさめたといふことである。

青空文庫情報

底本：「國木田獨歩全集 第四卷」学習研究社

1966（昭和41）年2月10日初版発行

入力：小林徹

校正：しず

1999年6月22日公開

2004年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

石清虚

國木田獨歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>